

クララ・E・マッテイ（著）／中野 剛志（解説）／井坂 康志（訳）  
『緊縮資本主義：経済学者はいかにして緊縮財政を發明し、ファシズムへの道を開いたのか』

（東洋経済新報社）



立命館大学経済学部教授 松尾 匡

になった東洋経済新報社もノリノリだ。共産主義の赤とアナキズムの黒のツートンカラーで、新左翼系出版社のテイストの、おどろおどろしい装丁で売り出している。

著者は、欧米を股にかける新進気鋭の非主流派の経済学者で、ベストセラーになって世界11カ国語に翻訳されたらしい原著 *The Capital Order: How Economists Invented Austerity and Paved the Way to Facsism*（資本の秩序：経済学者たちはいかに緊縮を生み出し、ファシズムへの道を開いたか）のほか、*Escape from Capitalism*（資本主義からの脱出）という本も出している（評者の以前の共著本『資本主義を脱却せよ』みたいなタイトルだな）。言うまでもなくバリバリの左翼で、その筆致からは資本主義批判の情念が溢れ出す。しかし、日本の左派論壇の中で彼女の名が紹介されることはあまりない。

こんな本の巻末解説を依頼できるのが右派の中野剛志さんしかいなかったあたりに、日本の左派論壇の現状が表れている。いや私に話がかきても、多忙すぎて困るし、この書評みたいなことを書くのが目に見えていて、商業的に迷惑でしかないだろう。そう思われていることは自覚している。中野さんも思想的にいちゃもんをつけることなく、学術的で正確な解説をしてくれ

この本はジャンフランコ・マッテイと、「世界中で闘う過去、現在、未来の革命を担う人たち」に捧げられている。ジャンフランコは著者クララ・E・マッテイの大伯父で、ムッソリーニ支配下のイタリアで反ファシズムのレジスタンス活動に加わって、「2日間ぶっ通しの拷問の果てに、仲間を売ることをよしとせず、自らベルトで首を吊った」とのことである。

その熱い献辞にふさわしく、この本は全編真っ赤っかな本である。資本家向け出版物が表看板のくせに、何を血迷ったか邦訳を出版すること

ているので、頼んで正解だったのだが。

この本は、表向きは経済史の本である。第一次世界大戦直後から1920年代までのイギリスとイタリアを対象にしている。だから、一部の左派的論客には、この本の価値をその時代の特定の国の歴史研究に切り縮め、一般化して現代に適用することを避ける論調もあるようだ。しかしもちろん著者の本意は、最終章が現代を扱っていることからわかるように、むしろ一般化して現代に適用することにこそある。資本家階級やその立場の行政エリートや経済学者たちが、労働者階級を屈服させて、その犠牲のもとに資本主義を救い、資本蓄積のスムーズな発展を実現するための強力な武器となったものこそが緊縮政策だったということ、そのためには、民意に左右されないエリート専決制度が志向され、時には暴力的な民主主義の蹂躪も必要視されること、これである。

それゆえ本来この本が主題にしているのは、支配階級による緊縮攻撃のほうであるが、にもかかわらずこの本では最初三分の一ぐらいの分量をたっぷりかけて、その前段階の労働者階級の前進時代を、熱い共感を込めて描いている。著者によれば、第一次世界大戦で資本主義の原則が棚上げされて政治による経済のコントロールが実現されたのを目の当たりにした労働者たちが、なんだできるのかと、戦後、資本主義の脱却の動きに乗り出したのだ。

戦争と戦時インフレによる暮らしの悪化を取り戻すための賃上げを求めて、激しいストライキが燃え広がったのは言うまでもない。それだけではない。自分の職場である工場を占拠した労働者たちによって、あるいは職人的熟練工たちの組合によって、出資への報酬を目的とするのではない自主的な生産が行われ、実際に経済が機能したのだ。そして彼らは、福祉に医療に

教育に住居保障に、財政均衡にとらわれない積極的な財政支出を求めて闘い、これを勝ち取っていった。多くの人が社会主義は実現可能と思い、資本主義体制は追い込まれていた。

これが、1920年代に入って逆転するのである。

この本は、訳のせいなのか（関係代名詞節を後訳するとやむを得ないのか）、著者にとって敵の考えの内容を「～である。」と断言調で延々続けて説明する。そんな調子で、金利を上げて通貨価値を高くすることや、財政均衡が大事だという金科玉条や、中央銀行の独立性や、「なにがなんでもインフレ退治」や、世論に左右されない専門家への一任を力説するものだから、文脈の読めない左派・リベラルは、それこそがこの本の主張だと勘違いして「そうだ、そうだ」と読んでしまいそうだ。これらの主張は、そうしないと資本主義経済の正常な進行が破綻してしまうという理由から導き出されているわけだから、自覚するしないにかかわらず資本主義体制の超克を目指す立場などとっくに捨てている論者たちにとっては、まことにふさわしい読み方だろう。もちろん、こうした考え方のもとで緊縮政策が強行され、労働者の闘いが屈服させられ、労働強化や実質賃金低下や公共サービス削減がなされた結果もたらされた、ごく少数者だけが大きく受ける経済こそ、著者の敵側にとっての正常に進行する資本主義なのである。

この過程では好景気が緊縮政策で頓挫されたのだが、注意すべきは、緊縮政策が不況をもたらすことをもって、単なる政策の誤りとみなすのは間違っているということだ。著者によれば、不況で失業が作られることで、労働運動の戦闘性がくじかれ、思惑通り、労働者を犠牲にした資本の支配が確実になるのである。反緊縮政策による不況脱却志向を「経済成長志向」と呼んで忌み嫌う立場が、いかに本書の左翼的立場から

---

かけ離れているかわかろうと言うものだ。

最後に、イタリアの大物の自由主義経済学者も、イギリスの政財官のエリートも、緊縮政策の強行のためにムッソリーニの暴力的独裁を積極的に容認していたという指摘を紹介しよう。これは何もこのときだけの特殊事例でないことは、最終章にあげられるチリのピノチェット独裁などの例からもわかる。今も昔も緊縮派は、世論のコントロールに服す領域を制約してエリート専門家の判断が守られる領域を拡大しようとする点で、本質的に反民主主義なのである。